

元片岡物産ブエノスアイレス事務所代表、中田龍之助氏が纏められた一代記「花便り」（前任の大倉商事時代を主に）の後編「花便りⅡ」を掲載致します。

## 「花便りⅡ」

中田龍之助

2018/07/14

2005/03に「花便り」を書いてから早や13年余経ち、心身ともに老化が徐々に進んでいる。何時まで正確に記述できるか不明なので、又、且つ、時効もとっくに過ぎているので、ブエノスで使用していた古い手帳を手元に置き、1998/08の「大倉自己破産」をゆっくりと時計を逆回しにして書き始めます。因みに、私は1981にLUFTHANSAから貰った勸進帳の様な手帳を愛用。1997にそれは途切れたが、同様な物を銀座の伊東屋で見つけ愛用し、現在に至っている。2006/01に現役引退後、記録するものはプライベートだけに成ったので、毎月精々数行しか書いていないが、現役時代の其れは殆ど隙間が無いほど悪筆で皆汚れている。手元にある1998の8月のページは今でも其れを見ると様々な事が一挙に記憶の底から湧き上がってくる思いです。

1998/08/02 ブエノス店の日本人駐在員名倉君から、「東京の財務の同期から連絡有り、大倉の資金繰りが可也厳しい事に成っている。初耳の地方の金融機関からも金策している。」を聞かされる。又、本社の訪問出張者からも、バブル景気の時に慣れない不動産に多額の金をつっ込んで、金繰りが儘に成らないのとの情報も聞いていた。

08/04 東証1部で大倉株が一挙に¥134→¥84に成り、一時ストップ安。

08/06 米国大倉財務からブエノス店の最大取引先（PENAFLORE(ペニャフロール→亜国NO.1のワイナリーでワイン原料の濃縮葡萄ジュース・バルクワイン・ボトルワインを日本の多くの大手ワイナリーに15年以上供給してきた。)への支払繰り延べ要請が有り、先方に少し遅れるを伝え、了解を取った。

08/20 PM1:00頃、訪問客をエセイサー国際空港から送り出し、オフィスへ向い高速道路を運転中に携帯が鳴り、秘書が「HAY LLAMADA DESDE SENOR. IWASAKI DE TOKIO→東京の岩崎さんから電話有りました。」日本⇄亜国の時差は丁度12時間なので、夜中の1時に何故、東京から電話？を感じていたら、PM2:00頃に彼から電話が入った。

何時もと違う口調で、「残念ですが、明朝(8/21金)東京地裁に自己破産申告をします。今後の動静は逐一連絡します。亜国の法律に準拠して清算手続に入って下さい。」を受けた。

何時かこの様な日が来るかも知れないの不安は多少なりとも有ったが、矢張り「長年勤めた会社が破産」を現実で付きつけられると、正直な処、可也、落ち込んだ。

08/21 朝 日本人駐在員の責任者で作る私的な集まり“オンブ会”の2泊3日で隣国・ウルグアイへのバス/ゴルフ・ツアーの幹事で有ったが、皆に「仕事の都合で行けない」を告げ

た。東銀の支店長から「事情は承知しています。気落ちなさらぬ様に」を耳打ちされ、ヤクルトの押川さんが代行を引き受けて呉れた。「流石は東銀、早耳！」に驚いた。東京地裁で自己破産申告は即刻受理され、本林破産管財人(後の東京弁護士会会長)を任命。其のニュースは即、万民の知る処に成り、翌週からはブエノスでも大騒ぎに成った。早速、現地の全ての取引先に自己破産確定を連絡し、契約未引き渡し残の洗い出しを頼んだ。オフィスの顧問弁護士に面談し、従業員の退職手続に入るように要請した。此の週の中頃から普段は良き仲間、友人の大手商社現地社長・支店長から電話が三々五々入り、「東京からの指示で、大倉さんの商権乗っ取りに着手せよ。」を告げられ、「当方は倒産したので、致し方無い。」を伝えた。

08/31 朝 10 時頃に、破産管財人“本林弁護士事務所”の NO.2 綿引弁護士から電話があり、「これから申上げる事は大変重要な事なので、メモを取りながら聞いて貰いたい。破産手続の清算作業中ですが、営業本部の中には立派な黒字を継続して出している部隊も多々ある。色々な経緯も有ったのですが、今般、日本で初めての「商社商権の分割営業譲渡→現存の商売・商権と其れを担当する人材も一緒に売り出すの意味」に挑戦して、清算の補填金上積を図り、従業員退職金上積に補填したい。中田さんの所属の食糧本部は長年 NO.1 の稼ぎ頭で、ブエノス店はその中でも一番の店です。東京地裁からは初めての試みに対して、特別の計らいを貰い、約一か月の執行猶予を取り付けました。食糧本部で目途が着く様であれば、他の本部も順次同様にします。何れにせよ、店の破産整理は進めて貰います。食糧本部の営業譲渡の売り手先が決まれば、同時並行で其の会社の新規ブエノスアイレス事務所の設立準備の段取りに成ります。その間の店の全ての経費は管財人の預かり勘定から出資するので安心して貰いたい。又、決着が付く迄は是非、本件に集中して貰いたい。」

電話を切り、「営業譲渡？営業譲渡？」が何度も頭を過りましたが、初めて聞く言葉に、「本当に旨く行く事なのかな？」の不安を感じました。午後一番に、一番大事な取引先の PENAFLOR の LUIS PULENTA 社長に面談し、管財人の話を伝え、この営業譲渡の動静がはっきりする迄は、独自の動きを封鎖して見守って貰いたいを要請した。此の時は春（日本とは季節が真逆）の葡萄の収穫期と対日輸出契約も終えて、製品の出荷の時期に入っていたので、PENAFLOR 社は一気に苦境に立たされた。因って、大量の対日の玉(製品・成約)を可及的速やかに、日本で転売しなければ成らなかった。大倉倒産の知らせを受けて、LUIS 社長は部下の CANAY 輸出部長・HOSHINO 技術部長の 2 名を其の目的で既に、東京に派遣していた。しかし、当方の意向を理解し、即刻、小生の目前で東京の滞在先ホテルに滞在する二人に電話し、「転売活動を一時差し止めて帰国せよ。」を命じた。

食糧本部の片岡物産への営業譲渡が何時決着したかの正確な日時は小生の記録に無いが、多分 10 日間以上は時間を要したと思います。当事者の石井食糧・物資本部長・取締役、上野食糧部長から後日談で聞いた処、東京地裁から管財人が営業譲渡を行うを聞き、大手 6 商社

は全てと中堅処 2 商社の計 8 社が出揃った。しかし、一番の眼目は時間が非常に短く切られているので、的確な結論を一番早く出せる会社に的を絞った。大手には稟議制度が定着しており、ボトムアップに必ず時間が掛かるので、執行猶予の一カ月は極めて厳しいと判断。因って、中堅でトップダウンに絞った。片岡の対応が迅速で的確だったので、管財人は譲渡の詰めを進めたとの事。結論として、管財人は食糧本部の約 7 割程の商材・商権・人材を譲渡する事を決め、28 億円で売却し、退職金の積み上げと成った。

これに引き続き、航空機部門、木材コンポーネント部門、自動車部品部門等の譲渡が進み、退職準備金の更なる上積が出来、倒産会社としては極めて異例の正規退職金の 9 割程を従業員は手に入れる事が出来た。

営業譲渡出来た本部・又は、其の一部に所属した社員は全員では無いが大半の人は譲渡先に移籍した。しかし、其れが不可の部隊に所属した社員は皆、個々に転職先を見つけ出す苦勞を負わされた。

09/20 大倉ブエノスアイレス事務所はこの日に法的に閉鎖。ベルグラノー（高級住宅地）の社宅マンションは東綿の田村所長に譲渡。

09/25 片岡物産から正式辞令（ブエノスアイレス事務所長）を拝命。

10/05 片岡物産ブエノスアイレス事務所と社宅をダウンタウンの高層ビルの 21 階に開設。規模は従前の旧大倉の約 1/2 に小さくした。

10/10～10/13 片岡社長が上野部長を連れて、最大取引先の PENAFLO 社 MENDOZA 工場視察と LUIS PULENTA 社長と独占対日輸出契約締結で訪亜。

片岡は 5 年契約を目指したが、PENAFLO にとっては片岡は新参者故、5 年は合意せず。取敢えず、2 年半でスタートした。余談だが、その後は 5 年契約に切り替え、現在に至る。

10/20 片岡東京から第 1 回目の送金 US\$41,812 を受け、自己立替分を補填。管財人からの送金は一か月分のみで有ったので、止む無く、その後は自己資金で回していた。

此れから帰国(2000/07/28)迄の 1 年 10 か月間は日本のワインブーム継続が有り、お蔭様で恙なく公私共に安定した楽しい良い時間を過ごせました。

日本初の商社商権の営業譲渡は正に僥倖で、全く想像だに出来ませんでした。

考え出した管財人も優秀で凄いなと思いますが、買い取った片岡社長も英断で、大変な人と理解しました。帰国後の或る時の社内パーティーで、偶々、社長と小生の二人きりの話しの際に、日頃から疑問に感じていた事をぶつけたました。

「訪亜の初日、ホテル CHECK-IN 後に、昔のブエノス港に是非行きたい。」を言われたので、旧港が有ったタンゴ発祥の BOCA（ボカ）地域にお連れした。社長は車を降りて、岸壁に近ずき、暫しの間、海を見ていた。何故に、古い港に来たかったのか？

此れに対して、社長は「あーそーか。実は俺の親父は広島出身で、若い時に米国西海岸に

移住し、彼の地で、港のチャンドラー（寄港する船に食糧・生活物資を供給する業者）を遣り、可也良く回っていた。或る時、南米の亜国が豊かで賑わってるを聞き、亜国との関係を持つ様に成った。ブエノスアイレスの地に如何程の関わりが有ったか定かでないが、親父の足跡の地を踏んで見たかった。当時、親父は未だ独身だったが、広島で火急の件が発生し、止む無く帰国した。その後、結婚し、私が生まれた。若し、帰国しなかったら、私はこの世にはいませんでした。」

又、別の機会に、「何時何処で営業譲渡を知ったのか？」に対して、「避暑で軽井沢に行った帰りの新幹線で夕刊を見ると其の事が有った。すぐさま東京駅から直接、“さくら銀行”に行き、幹部と相談し、参戦する事にした。

大倉は昔から、財閥大手で有名。だから、其の一角を是非、手に入れたかった。」

片岡物産は片岡社長が戦後のドサクサの中から、一代で築き上げた 100%オーナー会社で食品関連商社機能を有する。特に、目玉としては欧州の有名ブランドの日本国内での独占販売権が主体で、トアイニング・バンホーテン・ゴディバ・ラバッツア等有り、独自開発商品ではモンカフェを有する。全国の主要デパート・大手スーパーに勘定を持ち、きめ細かい販売管理で成功してきた。又、業務用のホテル・飲食店・カフェ等にも代理店経由で幅広く細かく物品を流通している。

小生は帰国後、旧大倉食糧部で無く、片岡本体の国内販売部隊で業務用のラバッツア（イタリアの有名ブランドコーヒ）販売に退職まで関わった。

業務を通じて一番驚いたのは、我々商社の薄口銭の原料・原材料商売と違い、片岡が扱う商品の利益率は高く、完全に一桁違っていた。初めて、国内商売の面白みを垣間見た。営業譲渡の動きの最中に、LUIS PULENTA 社長と英訳された片岡の決算書を一緒に見た時に、売上高に対する営業利益が非常に大きい事に二人で驚いた記憶が有ります。最終経常で過去 20-30 年間、毎年 20-30 億円敲き出していました。

「小粒ながらピリット辛い！」の感が頻りでした。

退社後 12 年が経ち、世の中の仕組みが色々な処で大きく変わって来ています。

1998/09 63 名が旧大倉食糧部から片岡へ営業譲渡で移籍しましたが、約 20 年経ち、残り組の人数は一桁になったと聞いています。しかし、其の商権は殆ど全てが生き残り、現在の片岡の背骨の一部に成っているを聞かされ、「あー良かったなー」が自然と体の中から湧き上がります。

営業譲渡の外地での先兵として振り返ると、PENAFLORE の LUIS PULENTA 社長は大倉倒産で一挙に奈落の底に突き落とされた。キリキリ舞の最中に、社員を東京に出張させ、何とか窮地を開くべく葛藤していた。其処に、突然湧いた管財人の営業譲渡の試みに、当方と東京の当事者達を信じて、「大きな賭けに乗って呉れた！」が何と言っても我々の最大の援護射撃に成った事

は大変大きかった。若し、部下への中止命令が出ていなかったら、流れは支離滅裂に成って、営業譲渡は頓挫した可能性大と思います。

翻って前の事を紐解くと、1997 春過ぎ頃から、LUIS の前任社長 CARLOS PULENTA が MENDOZA 州の州知事を狙って政治活動が盛んで有った。因って、本業に付いては、出来れば PENFLOR 社の転売を目論み、マスコミでも何回と噂に上がり、関連新聞記事も錯綜した。抑々、PENAFLORE は 1800 代後半のイタリア移民がアンデス山脈の麓の MENDOZA 地域でワイン作りを始めた事がスタートで、2 代目・3 代目が其々頑張り亜国 NO.1 のワイナリーに変貌した。3 代目の世代は従兄弟・従姉妹の計 16 名で夫々が PENAFLORE の株を均等に保持。CARLOS は他社への転売目的でそれらの買占めに動いたが、当時、マイアミの MARIOTTO HOTEL のオーナーで有った LUIS が買占めに賛同しなかった。LUIS は米国の大学を出て、若くして PUERTO RICO で蒸留酒製造を始めて成功し、MARIOTTO MIAMI を手中にした。一族の株を他人に渡したく無かったので、CARLOS の代わりに株を全部買い占めて、1997/09 に PENAFLORE の新社長に就任した。CARLOS は在任中、日本の大手顧客への接触は頻繁で、関係は良かった。しかし、LUIS は空手で来たので、顧客との接点はゼロで有った。そこで、「早急に訪日して、大手顧客に就任挨拶するのが得策」と強く進言した。11/11 から 5 日間、訪日し顧客への挨拶回りが実現した。日本出張から帰国後に、「適切なアドバイスで、日本顧客との関係も構築出来、意義ある出張で有った。」と礼を言われた。

その後、倒産迄の 9 か月間は彼等との仕事は全て順調に旨く回っていた。

余談だが、彼は在米期間が長く、米語で生計を立てていたもので、母国語の西語を合わせたバイリンガルで有った。此の事は正直な処、小生にとっては極めて有利に働きました。彼にとって亜国では米語を話す事は稀で、小生が米国で 5 年の駐在経験が有るを知って、何時の間にか、二人の間では全て米語で熟していました。

今思えば、倒産劇の逼迫した中で、営業譲渡の試みの話の皮きりから、逐一動く動静の遣り取りを米語で遣れた事は僥倖でした。

小生の話を良く聞き入れた後に、目前で国際電話を東京に掛けて、部下に活動中止令を出した場面は鮮明に焼き付いています。1 年前の PENAFLORE のゴチャゴチャ劇の最中に、当方が手助けした返礼の ” GIVE AND TAKE ” で有った様にも思えます。

毎日の様に清算対応と営業譲渡が交差しながら同時並行進行する中で、愈々、片岡との詰めの段階を迎え、緊迫感が有りました。営業譲渡が成立すれば、即、新規事務所開設手続が目前に有り、正直な処、当時、小生以外に代わりの人は存在しませんでした。最終判断をど一するかを自問する中で、何時も頭から離れない管財人 NO.2 綿引弁護士の一言、「営業譲渡が成功すれば、皆さんの退職金が積み上がって行きます。何も結果が出なければ、可也、悲惨な事に成ります。自分の為、人の為に、是非、此れからの一カ月は集中して頑張ってください。」矢張り、此れが” 殺し文句 ” で、小生の心底に刺さりました。

若い頃、Houston 駐在から帰国後、即、一年間の組合活動を懇請され委員長を引き受けました。当初は軽い気持ちで遣っていましたが、度重なる団体交渉が決裂し、土壇場でストライキを構えた時の非常に苦しく重い状態が頭を幾度となく過りました。命題は「組合全員の生活向上・改善」で有り、妥協も打算も有りませんでした。何かしら、意識の底の部分で昔の記憶が作用したかも知りません。「仲間の皆の為に、此処は成り行きに任せる！」に自然と向かって行ったと思います。自分の為、仲間の為に「何とか一石を投じた。」の感じがしています。

最後に、是非、書き留めておかなければいけない事が有ります。大倉自己破産が公示されてから、管財人からの電話以前に、時を経ずに、二人の友人から電話が入り、「早く清算を終えて下さい。後の事は心配しないで、こちらに任せて下さい。大丈夫です。」を聞かされた。一人目は旧大倉時代鉄鋼貿易でお世話に成った、住友金属工業の進藤さん（Houston で同時期に駐在していた。）が米国中西工業（自動車の部品工場）近澤社長の後釜での指名。二人目はブエノス店最大顧客メルシャンの大谷常務さん（国内販売・貿易関連統括者）が「既に上に話は通しました。早く清算をして、又、新規開設をして下さい。」を告げて来た。此の後に、管財人から電話で、行き成りの強い要請が舞い込んで、友人への対応は正直な処、迷っていました。日本初の商社商権の営業譲渡は首尾よく片岡物産に下され、当方は一挙に片岡物産の新ブエノスアイレス事務所開設の手續に走りました。因って、結果的にお二人の“地獄に仏”には、お答え敵わずに成ってしまいました。しかし、今でもお二人には“有難かったと同時に、大変申し訳無かった”の気持ちが入り交じります。

長い人生、色々な場面で喜怒哀楽を味あう事頻りですが、ブエノスで体験した自己破産→営業譲渡の一連の事は正直な処、一生涯忘れない事象で、深い記憶に残ります。

“MUCHAS GRACIAS”

中田龍之助

(なかた たつのすけ:元片岡物産ブエノスアイレス事務所長)